

大正・昭和初期における音楽活動の意義の変遷

―乗杉嘉壽の思想を中心に―

正木 遥香 (高等教育開発センター)

【要旨】

本論文は、従来研究において教育的活動の導入にすぎないと軽視されがちであった趣味講座の教育的意義を拡張することを目的とする。そのための手立てとして、代表的な趣味講座である音楽活動が、萌芽期の社会教育においていかなる位置づけを有していたのかを、当時の文部省官僚である乗杉嘉壽が編集に関わっていた雑誌の分析から解明する。分析の結果、音楽は芸術や娯楽としての側面のみならず、過酷な生活を慰撫し、社会の退廃を遠ざけるものとしての陶冶性を示すものとして用いられていたことが明らかになった。このことから、音楽活動のような趣味講座は、単なる教育活動への導入ではなく、活動そのものに教育的意図が含まれるものとして捉えられる可能性を有することが示された。

【キーワード】

音楽活動 (musical activities) 趣味講座 (classes and courses in hobbies) 社会教育 (adult education)

1. はじめに

1-1. 研究の動機と目的

日本の生涯学習は、自己充足的な活動が高い割合を占めている。実際、公民館やカルチャーセンターにおいて提供されている学習活動は、音楽、美術、茶道、華道といった趣味的な要素を含むものが多い。このような趣味講座は、これまでの社会教育研究において生活課題に関する話し合いなどといった教育的活動への導入にすぎないものとして軽視されてきた。しかし、こうした見方は、生活に役立つか役に立たないかという価値観を前提に教育や学習を捉える見方であり、このように矮小化した把握の仕方は、教育や学習を成立させるための基盤を弱体化させる危険をはらんでいる。そこで、本稿では、趣味講座の一つである音楽活動をとりあげ、従来研究で指摘されてきた趣味講座における教育的意義の拡張を試みたい。

生涯学習と音楽活動のつながりが示されたのは、1994 年に制定された「音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律 (音楽文化・教育振興法)」においてであった。同法は、国や地方公共団体が、学校教育も含めた形での生涯音楽学習の環境整備に努めることを定めたものであった。しかし、何人かの研究者が指摘しているように、学校の音楽科教育と生涯音楽学習との間には断絶があり (高萩 2000; 丸林 1999)、生涯音楽学習の理念は十分に浸透しているとはいえない状況にあった。これは、稽古事として独立した音楽学習が幼少時から学校外で実践される傾向にあり、これらの余暇としての音楽学習と学校内

の音楽学習との連続性が弱くなっているためだとされる（高橋 2013）。実際、音楽科教育で扱われてきたクラシック音楽や文部省唱歌を中心とした教材群と、日常的に学校外で嗜好されてきたポピュラー音楽とは様式的な特徴が異なっており、これらの断絶に拍車をかけていたと考えられる。

以上の議論からは、音楽科教育と大衆音楽の乖離が現代的な現象であるかのような印象を受けるかもしれない。しかし、社会教育における音楽活動の位置づけに関する議論を紐解くと、実は大正期にはすでに類似の論点が提示されていたことがわかる。当時の社会教育は、学校教育との緊張関係の中で自らが責任を負うべき教育の範疇を模索している段階にあり、それゆえに、音楽科教育と大衆音楽とのはざまにある葛藤を引き受けざるをえなかったのである。このように考えると、やや迂遠にも思われるかもしれないが、当時の音楽活動が担ってきた役割を辿ることは、趣味講座の教育的意義を拡張する際に有効だと考えられる。

1-2. 研究の方法

大正期以降の社会教育における音楽活動に影響を及ぼした人物としては、乗杉嘉壽（1878年11月19日 - 1947年2月1日）が挙げられる。乗杉は、川本宇之介らとならび、社会教育行政確立に尽力した人物として知られているが、晩年は音楽教育に力を注ぎ、日本教育音楽会会長、音楽会館理事長などを歴任している。社会教育研究においては、彼の思想に関する多くの先行研究が見られるものの、文部省時代の彼の思想と東京音楽学校時代の思想とのつながりに言及したものは、管見の限り見当たらない。しかし、数は少ないものの、教育における音楽の効用について文部省時代の乗杉が言及していることを考えると、彼の思想は連続したものとして位置づけなおすべきであろう。

そこで、本稿では、彼の思想が伺える資料として、雑誌『社会と教化』及び『社会教育』のうち、乗杉が中心となって編纂していた時代のものを主要な資料とし、乗杉の主著である『社会教育の研究』（1923年）や、彼の東京音楽学校時代の各種資料を補助的に用いて、彼の社会教育観と音楽観の連続性を明らかにしたい。

2. 乗杉嘉壽の社会教育観

議論に先立ち、本節では、本研究の主たる分析対象となる雑誌がどのような性質を有するのかについて、乗杉自身の社会教育観との関連に留意しつつ触れていく。

2-1. 乗杉の来歴

乗杉嘉壽は、眞壽寺住職であった乗杉寿貞の次男として東京府に生まれ、東京帝国大学で実践哲学を学んだ後、1904年に文部省へ入職した。最初に手がけた仕事は、普通学務局第三課における青年団に関する事業であり、この経験は以降の彼の社会教育論に影響を及ぼしたとされている。その後、しばらくは学校教育に関する仕事に携わっていたが、1917年からの欧米諸国への留学において、学校教育にとどまらない様々な教育のあり方について見聞を広めた。1919年に帰国した後は、通俗教育を主管事項とする第四課課長に就任し、社会教育主事の設置、社会教育研究会の組織など、社会教育に関する精力的な活動を行っ

ている。1924年に文部省を去ってからは、松江高等学校、東京音楽学校の校長として活動し、東京音楽学校を辞した2年後、1947年にその生涯を閉じた。

以上が乗杉の略歴であるが、主著である『社会教育の研究』は第四課時代に執筆されており、彼の社会教育観を端的に示している。ここでは、社会教育行政としての事業は、①学校の拡張事業、②公開講演事業、③図書館および巡回文庫、④教育観覧施設、⑤各種修養団体の経営および指導、⑦民衆娯楽の改善事業、⑧公衆体育、⑨生活改善運動、⑩特殊児童の保護教育など、多岐にわたっている。彼は、これらを「社会の生成発育のために必要かけくべからざる事業」として捉え、精力的に取り組んだ。彼の熱意は「油乗杉」と揶揄され、他の文部官僚からも、「当時の役人としては型破りの人物」（中田邦造）、「口も八丁手も八丁」（関屋龍吉）、「一種の愛すべき野心家」（出隆）という評を受けていたという（岡田 1983:108）。他方で、このような熱意ゆえに他の官僚と衝突することも多く、それゆえに文部省を去らざるをえなかったとされている（関屋 1975）。

2-2. 『社会と教化』および『社会教育』の変遷

『社会と教化』および『社会教育』は、文部省当局者の責任によって刊行された戦前の社会教育誌であるが、誌名、編集者、発行者、誌の体裁などの変遷を見ると、概ね以下の四期に分けられる。

時期	誌名	編纂の中心人物	発行者・体裁等
第一期 (1921年1月- 1923年7月)	『社会と教化』	乗杉嘉壽	大日本図書株式会社発行 定価一冊 30 銭、一ヶ年 3 円 50 銭
第二期 (1924年1月- 1929年7月)	『社会教育』	乗杉嘉壽 小尾範治（第一巻 第八号(1924年11 月)から)	編者、発行所は幾度か変わり、 内容も時期によって変化
第三期 (1930年9月- 1933年10月)	『社会教育』 (タブロイド版)	関屋龍吉	財団法人社会教育会の機関紙 として刊行
第四期 (1933年11月 -1944年3月)	『社会教育』	関屋龍吉	姉妹紙『青年教育研究』と合 併し、月刊誌となる 発行元は財団法人社会教育会 一冊 10 銭、年間 1 円

表1 『社会と教化』および『社会教育』誌の変遷

このうち、本稿では乗杉の足跡を色濃く残す、第一期および第二期の一部を主要な分析の対象とする。

なお、『社会と教化』は、刊行にあたり、「今や社会の実情はあらゆる方面に向つて改造すべきを要求して居る。而して浮調子な民衆と、混乱せる思想と、雷同的な運動とは何等の

目標もなく、大きな渦巻の中に投げられた俣、其の嚮ふ所に迷つて居る」とし、「民衆をして其の嚮ふ所を知らしめ、之を啓蒙誘導して社会を教化」することを理念として掲げている(文部省内社会教育研究会「發刊の辞」p.1)。そのため、『社会と教化』は、この活動を担う関係者の間での意思疎通のための手段であり、理論的・実践的な蓄積を共有化するための場としての役割を果たしていた。第二期以降は中心人物が代わったこともあり、『社会と教化』時代とは若干異なる社会教育論が展開されていると思われるものの、基本的には社会教育の行政担当者や実践者を意識した雑誌であるという点では一貫している。

2-3. 学校教育と社会教育の関連

周知の通り、明治の学制発布以降、教育の中心は学校にあり、社会教育の前身である通俗教育は学校の補完という役割を担うにすぎなかった。しかし、日清・日露の両戦後、資本主義の急速な発展や都市化・工業化の進行に伴い、大衆の教養の程度が国力の標準であるという意識が芽生えた。このような意識は、学校の補完にとどまらない新たな教育への要求へとつながり、それを受けて、乗杉は従来の教育の社会との断絶を指摘し、特定の人と場所と方案に制限されない人格技能修養の機会としての社会教育の必要性を主張した(「教育は斯くの如くにして改善されん」『社会と教化』第一卷第二号)。

ここで重要なのは、乗杉がいう社会教育が学校教育を含み、社会教育に学校教育のあり方そのものに対する改革の可能性を見出していたことである。これがいわゆる「学校の社会化」であり、乗杉は学校に対して社会の成員たる資質能力の涵養を期待したのである。乗杉にとっては社会そのものが、「協同目的をもつ個人を要素とする有機的な団体」であるがゆえに、教育も有機的な統合が必要であると考えていた(乗杉 1923:2)。

本節の第一項でふれたように、乗杉が多様な事業を社会教育の範疇に含めたのは、ここで述べたような社会教育観ゆえであったと考えられる。したがって、こうした社会教育観を反映した『社会と教化』および『社会教育』誌の内容もまた多岐にわたっており、何らかのキーワードを用いなければ、その傾向を辿ることは難しい。

3. 社会教育における音楽の活用

3-1. 「音楽」に関連する記事の分析結果

乗杉が中心となっていた時期における『社会と教化』および『社会教育』誌の記事のうち、「音楽」をキーワードとする記事を抽出すると、おおよそ四つのカテゴリに属していることが明らかになった。カテゴリの内訳は、第一に、童謡・俗謡・民謡の歌詞および譜面を掲載したもの、第二に、各種修養団体における音楽の活用について論じたもの、第三に、学校教育における音楽の活用について論じたもの、第四に、民衆娯楽問題の一環として音楽を取り上げたものであった。

また、全体的な傾向として、乗杉が中心となっていた時期は具体的な実践の場面で用いられるものとして音楽を扱ってはいるものの、音楽の効用について直接論じたものはあまり見られなかった。音楽そのものの効用について論じたものについては、乗杉が『社会教育』誌の編纂から手を引いた後に見られるようになる。こうした論考の中には、レコードやラジオの教育的利用について言及するものが多く見られた。1927年にビクターとコロムビア

という二大レコード会社が設立されたこと、翌 1928 年には日本放送協会によってラジオの全国放送が始まったこと（兵藤 2000）を踏まえると、音楽を媒介するメディアの普及度合いが当時の社会教育関係者の音楽観に影響を及ぼしたことが推測されよう。

以上を踏まえ、以下では具体的な実践の場面で扱われていたと推察される童謡・俗謡・民謡がどのような形態を有するのかを辿り、これらがどのように活用されてきたのかについて考察を行う。

3-2. 唱歌と社会教育における音楽

社会教育における音楽について具体的な検討を加える前に、当時の学校教育における音楽についても簡単に触れておきたい。有名な論考としては、明治前半期における唱歌教育の成立過程を検討した山住正己（1967）のものがある。山住は、唱歌の歌詞の検討を通して、そこに愛国心教育的性格および修身科の補助教材的性格を見出し、童謡などを媒体とした大正期における民間の自由教育運動を、唱歌科への対抗勢力として生じたものとして位置づけている。この論考に見られるように、学校教育における音楽は、国家統合としての機能が強調される傾向にあったようだ。しかし、実際の唱歌科・音楽科は、第一次世界大戦後の文部省が実科教育を重視したことによって教授時間が削減されており、音楽教師の地位も低い状態に置かれていたとされる。何より、大衆的流行歌が社会へ浸透しているという状況があった（菊池 1929:316）ため、唱歌自体はさほど社会に受容されていたわけではなく、唱歌の国家統合としての機能は十分に果たされていなかったと見られる。

一方で、社会教育において見られる音楽は、学校教育における唱歌とは異なり、童謡・俗謡・民謡を中心としていた。詳細は後述するが、これらの童謡・俗謡・民謡の一部は、唱歌と童謡の愛国心教育的性格を含むと同時に、大衆をその担い手として想定していた。それゆえ、社会教育における音楽という視点を入れた場合、山住の示した唱歌対童謡という単純な図式にとどまらない、多様な意味を含むものとして音楽が扱われるのである。次項では、具体的にその様相について検討を行う。

3-3 童謡・俗謡・民謡と社会教育

『社会と教化』時代に掲載されていた、童謡・俗謡・民謡の一覧を示すと、次々頁以降に挙げた表 2 のようになる。なお、これらは第一巻九号の『道路の歌』に数字譜と「ト調、軽快に」という指示があることを除けば、歌詞のみしか記載されていない。

『社会と教化』の第一巻第十号まで（1921. 1. 1～1921. 10. 1）は、『俗謡と童謡』等の特集があり、読者からの投稿を募っていた。そのため、童謡・俗謡・民謡は毎月掲載されていた。注目すべきは、図 1 に示したように、「俗謡」「童謡」の投稿要綱において、「内容は風俗を害せざるものなること」「方言は成る可く使用せざること」という記載があるということである。ここから、『社会と教化』においては、大衆にとっては親しみやすいものでありながら、非常に教育的な意図をもった歌が掲載されていたことがわかる。

しかし、第二巻（1922. 1. 1～1922. 12. 1）になると童謡・俗謡・民謡は目次にすら現れず、文中の一部にあらわれるのみである。第一巻第十一号および、第三巻第一号～第三巻第六号（1921. 11. 1, 1923. 1. 1～1923. 6. 1）までは歌の題が直接目次に掲載される形となっており、作歌者も基本的にある程度名の知れた人物であると考えられる。

内容面について検討を加えると、傾向として、第一巻六号くらいまでは、単純に情景を歌ったものも見られる。これらの例としては、『磯ぶし』（第一巻一号）、『俗謡』『盆踊歌』『さまよひ』（第一巻二号）、『ヨサコイ節』（第一巻三号）、『新磯節』（第一巻四号）、『春』『四季口説明』（第一巻五号）、『猫と椿』『白い雲』『つつじ』『新納武蔵守』（第一巻六号）などがある。

しかし、それ以降、一卷の終わりまでは、たとえ情景を歌っていたとしても、かなり明確に、共同自治の精神や国家意識の高揚、生活改善上での心得を盛り込んだものが増えていく。たとえば、『時間尊重の歌』『青年団歌』『消防団歌』の系統のもののほか、中島暁紅作のもの、『正月』『禮』（第一巻五号）、『地主と百姓』（第一巻六号）、『子守唄』『農家の喜楽』（一卷七号）、『道路の歌』（第一巻九号）、『道』（第一巻十二号）などがこうしたものにあたる（図2）。「互ひにとくを受ける為 折角つけし道なれば 人に迷惑かけぬやう 心するのが務めです」（『道路の歌』）といったように、教化的な歌詞であるといえよう（図3）。

▼「俗謡」「童謡」を募る

- 一、各地に謡はれつゝあるもの
- 二、新たに作りたるもの

▲注意

- 一、内容は風俗を写せざるものなること
- 二、(一)は特に「新作」と朱書すること
- 一、方言は成る可く使用せざること。但し止むを得ざる場合には其方言の註釋を別紙へ附記すること
- 一、調及び長短は隨意たること
- 一、應募原稿の宛名は「文部省内地社会教育研究會編輯部」と記すこと
- 一、新作にして優秀と認めたるものには賞金を呈す。
- 一、メ切は毎月廿日限とす。
- 一、用紙は半紙とす
- 一、讀難き文字にはふり假名を附すこと

図1 『俗謡』『童謡』の募集要項（『社会と教化』第一巻第一号（1921.1.1））

民謡と童謡

青年団歌

福岡、筑紫郡
水城村青年會
帆足 眞藏

一、朝に曉の光を拜し、
夕に陽の光を拜し、
四王寺山頂を繞り、
水城麓の堂を繞り、
見よ親等の松の色、
歌へや親等の暮の聲、
都府樓瓦に響を傳へ、
二百の親等氣を息、
三、口遊歩世は明け、
協心努力村榮ゆ、
歴史の跡に響きて、
親等の堂に響きて、
四、青春の血は響きかへり、
皮肉は響きかへり、
あゝ此意無き村のため、
響へや響へや響へや

造林愛護の歌

北海道釧路郡
東川町安村 寺脇 讓

一つとや人々一つの心にて
二つとやふだん我等の朝夕に
三つとや昔々知るや葉や露
四つとや夜ひる住居のたももの
五つとや今は是の造るとき
六つとや昔々知るや葉や露
七つとや南北兩土に山あれど
八つとや山も頭のはげんは
九つとや心は常に造林に
十とや貴ともは林なり
かたりに伐らず愛すべし

青年団歌

同 人

(一) 山河も美なる我村の
校方に見ゆる富士の山
流れも清き尻川の
水に委ねようつらん
(二) 朝な夕な此の暮の
深き森をそのまゝに
響をあげよと心に
眺もかたき我集へ
(三) 山は正義の姿なり
川は心の鏡なり
我等も常に身と心
山と川とに準ぶべし
(四) 御國の寶富國の
基を築く任務あり
心もたき我集へ
振つて起てよ諸共に
父祖の志に準びて
勤儉共にたゆみなく
努力めよと我集へ

青年団歌

同 人

(一) 山河も美なる我村の
校方に見ゆる富士の山
流れも清き尻川の
水に委ねようつらん
(二) 朝な夕な此の暮の
深き森をそのまゝに
響をあげよと心に
眺もかたき我集へ
(三) 山は正義の姿なり
川は心の鏡なり
我等も常に身と心
山と川とに準ぶべし
(四) 御國の寶富國の
基を築く任務あり
心もたき我集へ
振つて起てよ諸共に
父祖の志に準びて
勤儉共にたゆみなく
努力めよと我集へ

図2 『民謡と童謡』の例
（『社会と教化』第一巻第十号（1921.10.1））

道路の歌 (農村)

兵庫縣川邊郡六瀬村清水 福井龍太郎

(音譜) ト調 輕快に

5. 5. 1. 2.	3. 2. 3. 2. 1.	6. 1.	2. 3. 2. 0.
の. 5. 2. 2.	や. 3. 2. 2. 2.	か. 1. 3.	を. 2. 2. 1. 0.
6. 6. 6. 6.	1. 1. 3. 1. 2. 2.	は. 3. 3.	を. 2. 2. 2. 5.
ひ. 5. 5. 5. 0.	ひ. 3. 3. 3. 0.	ぬ. 1. 2.	て. 3. 3. 2. 5.
み. 4. 6. 6. 6.	お. 5. 5. 1. 2.	い. 3. 5.	し. 3. 2. 1. 0.
1. 1. 6. 6. 6.	い. 5. 5. 5. 5.	い. 3. 5.	し. 3. 2. 1. 0.

1 野越え山を越え 村と村とを縫ふて行く
道のふたし致しませう 聞いて下さい今暫し
2 朝な夕なにわたしらが 道を通つて来るのです
数も知れない品物は 轆轤や 簀時針など
3 帽子反物下駄に 轆轤や 簀時針など
4 材木瓦 石 硝子 壺や 火鉢 鍋 庖丁
5 魚類貝類様々の 乾物類に 到るまで
目につく品の大ていは 道を通らぬ物はない
6 日毎々々に働いては 道を通つて買らね行く
使ひ残つたあとは 皆 道を通つて買らね行く
7 人の聲しに 大切な 道を暫く 御覽なさい
8 東に 西に 南北 行きかゝ様の面白さ
9 遅い 荷車 人力車 早い自動車 自動車や
大人子供の 區別なく 目のまゝ様に 通り行く
10 互ひにとくを受ける為 折角つけし道なれば
人に迷惑かけぬやう 心するのが務めです
床几出したり 荷車を 置さねたり 立話し
さては子供の遊びなど 行儀はづれた行ひぞ
前をシツカリ眺めつつ 左左を通るなら
あぶない事は少く 自分も人も皆がよい

図3 『道路の歌』
（『社会と教化』第一巻第九号（1921.9.1））

巻号（発行）	題名	作者	地方・作曲者所属
第一巻一号 (1921.1.1)	手鞠歌		
	時の歌	林吉之	
	時の歌	岡本澄歌	
	磯ぶし		
	帝国青年の歌		
第一巻二号 (1921.1.1)	子守唄		美濃地方
	俗謡		岐阜県地方
	盆踊歌		岐阜県地方
	さまよひ（新作）	中島暁紅	
	俚謡		静岡県地方
	島節		静岡県地方
	兵庫県飾磨郡城北民歌		
	青森県瀧城青年団々歌		
第一巻三号 (1921.3.1)	幼な子よ（新作）	中島暁紅	福岡歩兵第十四総隊十中隊
	ヨサコイ節（新作）	土居美猛	高知県長岡郡十市村
第一巻四号 (1921.4.1)	修養数へ歌（女工の為に）	小保方梅子	
	新磯節（新作）	細谷観藍	新潟県刈羽郡上小国村青年会
	国家少年（新作）	中島暁紅	福岡歩兵二十四総隊第十中隊
第一巻五号 (1921.5.1)	児童教養かぞへ歌	三田谷啓	大阪市社会教育児童課長
	春	銀杏子	
	児童参拝唱歌	青山義雄	広島県高田郡戸島村
	正月（新作）	細金与	新潟県刈羽郡上小国村青年会
	四季口説明	島袋源一郎	沖縄県社会教育主事
	青年団員の歌	笹熊五郎	弘前市笹森町五
	禮	田中彦熊	熊本県菊池郡西合志村江民
第一巻六号 (1921.6.1)	猫と椿	銀杏子	
	白い雲		
	つつじ		
	新納武蔵守		
	地主と百姓	野口雨情	
	田植歌		岐阜県地方
	宴席歌		岐阜県地方
	俗謡		岐阜県地方
第一巻七号 (1921.7.1)	防火宣伝数へ歌		愛知県実飯郡下地尋高小学校
	時を守れ		愛知県実飯郡下地尋高小学校
	体育衛生の歌		愛知県実飯郡下地尋高小学校
	看病の歌		愛知県実飯郡下地尋高小学校

巻号（発行）	題名	作者	地方・作曲者所属
第一巻七号 (1921.7.1)	子守歌	笹熊五郎	弘前市葉林町
	消防軍歌	光易憂斎	広島県高田郡坂村小学校
	農家の喜楽	田中彦熊	熊本県菊池郡西合志村江民
第一巻八号 (1921.8.1)	青年団々歌	伏脇後岩	富山県射水郡七美村富山県立商船学校教諭
	豆ばたけ	水谷まさる	
	時間尊重宣伝	赤木眞臣	長崎県対馬社会教育主事
	時間尊重の歌	寺脇護	北海道虻田郡東俱知安村東カシブニ教授所
第一巻九号 (1921.9.1)	道路の歌	福井龍太郎	兵庫県川邊郡六瀬村清水
	青年団歌	帆足眞蔵	福岡県筑紫郡水城村青年会
第一巻十号 (1921.10.1)	造林愛護の歌	寺脇護	北海道虻田郡東俱知安村
	青年団歌	寺脇護	北海道虻田郡東俱知安村
	秋の晩	堀内浩	
	消防団歌	國枝敬二	岐阜県安八郡仁木村
	鴨緑江節	帆足眞蔵	福岡県筑紫郡水城村青年会
第一巻十二号 (1921.12.1)	道	田中彦熊	熊本県菊池郡西合志村江民
	秋の夕暮	堀内浩	
第二巻一号 (1922.1.1)	青年団の歌		滋賀県栗太郡治田村
第二巻二号 (1922.2.1)	旭光照波	田中熊彦	熊本県菊池郡西合志村江民
	防火宣伝数へ歌		奈良県
第二巻六号 (1922.6.1)	日東帝国少年の歌	松本俊男	
第二巻十号 (1922.10.1)	女性の様々 その一 虚栄のメリシヤ嬢	迫二次郎	薩摩 亀山実業補習学校教諭
	女性の様々 その二 堅実なるかね子嬢		
	女性の様々 その三 貞節の潔婦		
第三巻一号 (1923.1.1)	美の女神様の誕生	玉置光三	
第三巻二号 (1923.2.1)	大黒様と白兔	玉置光三	
第三巻三号 (1923.3.1)	嘉穂の夜明	秋元湖帆	
	朝出		
	港		
	村の夕暮		
	夕焼		
第三巻六号 (1923.6.1)	鬼ヶ城の峯	玉置光三	
	櫓の樹影		

表2 『社会と教化』における童謡・俗謡・民謡記載歌曲一覧

このような、あるべき国民像ともいうべき歌詞を用いる傾向は第二巻にも継承されているが、第三巻になると再びその直裁さはなりを潜める。『美の女神様の誕生』（第三巻一号）『大黒様と白兔』（第三巻二号）は、『日本書紀』を題材にしたものであり、国家礼賛ととれなくもないが、その他の歌はすべて、自然の情景の美しさをうたったものである。

『社会教育』に改題されて以降は、『社会と教化』時代とは異なり、歌詞だけではなく、五線譜の譜面も同時に掲載されるようになる。同様に、以下の表3にその一覧を示す。

掲載号	題名	作詞・作曲	調・音階
第一巻一号 (1924.1.26)	海の初日	葛原しげる作歌・弘田龍太郎作曲	ト長調
第一巻二号 (1924.4.5)	雪の日本	葛原しげる作歌・弘田龍太郎作曲	ト長調・ヨナ抜き音階
第一巻三号 (1924.5.31)	花の市	葛原しげる作歌・弘田龍太郎作曲	イ長調・ヨナ抜き音階
第一巻四号 (1924.6.20)	梅雨	葛原しげる作歌・弘田龍太郎作曲	イ短調

表3 『社会教育』における童謡・俗謡・民謡記載歌曲一覧

これらの曲は、当時の民衆にとってなじみ深い、日本的なものが選択されているようである。歌詞を見ると、『社会と教化』第三巻と同様、一時期みられたような直裁的な国家意識は見られず、基本的には美しい自然の情景をうたったものだということがわかる（図4）。

花の市

今日のはたんぼの花の市
赤い花屋は 蓮華店
紫花屋は 蜜店
皆仲よく見て廻る
舞つて踊れば
お花も笑顔
今日はたんぼの花の市
白い花屋の花買は
たんぼはちいさん 背が高い
風の子供で 大好きで
買つて背が
競争で 踊る

花の市
葛原しげる作歌

図4 『花の市』（『社会教育』第一巻第三号）

以上のように、『社会と教化』および『社会教育』に掲載されている歌曲は、総じて自然の美しい情景を基調としつつも、時期によって国家主義的な色彩の有無が異なっていることがわかる。この変化は、いったい何を示しているのだろうか。次項では、『社会と教化』および『社会教育』において見られる論考を検討し、この変化の背景を考えたい。

3-4. 乗杉時代の社会教育と音楽に関する論考

『社会と教化』における音楽についての初めての本格的な論考は、第一巻第二号に見られる、広島高等師範学校教授、長橋熊次郎による「俘虜を通じて見たる独逸の世俗音楽」であった。長橋は、ドイツでは音楽が国民思想統一や青年の心身鍛錬に利用されていることを示し、「青年団に於きましても、団員の趣味の向上と、青年の事業に対する持久力とを大ならしむる目的を以て唱歌を盛んに歌はせます。材料は唱歌組合の歌や軍歌と略ぼ同じで、愛国歌、愛郷の歌、旅のたのしみの歌などが主なものであります」(p. 35)、「要するに独逸の世俗音楽は、徹頭徹尾、軍国主義国家主義、民族本位のものであります」(p. 36)と述べる。これに対し、日本の状況については、「近年各地に青年団が組織されまして、大正五年には中央指導機関として青年団中央部が設立され、官民挙つて地方青年団の指導誘掖につとめられて居ります。団員の趣味の向上、元気を旺盛ならしむる為に、音楽上にも種々の娯楽方法を考慮しつつあります。併しながら、其の結果を見ますれば、浪花節や琵琶を聴くとか、尺八を弄ぶ位の所でありまして、此の大正の新時代の青年に相当するものがありません。之は共に研究せねばならぬ事と存じます」(p. 36)と、遅れが指摘されている。

このような音楽のみを題材に正面から取り扱った論考は、その後、乗杉が『社会と教化』および『社会教育』を刊行していた時代には見られない。多かったのは、むしろ、乗杉自身が「民衆娯楽の改良と誘導」(『社会と教化』第一巻第三号)において言及していたように、大衆の思想や風紀と密接に結びついた娯楽問題に絡めたものであった。乗杉は、「日本の娯楽現状を欧米のそれに比すると、實際幼稚なものである。耳から注ぎ込むべき趣味の国民音楽なく、徒らに金と時間とを空費する娯楽ばかりであるから、その不用意な空虚の油断に付込んで誘惑が跋扈する。国民の品性能率を高むる上にも娯楽問題は閑却されぬ。さうして趣味のない国民は憫むべきものである。此の意味から学校に於ても趣味涵養に努めさせ内外協力して民衆の趣味向上を計る積りである」(p. 14)と述べ、民衆の風紀や思想に関する問題解決の糸口を娯楽に求めた。同様の傾向は、普通学務局長の赤司鷹一郎の論考にも見られ、赤司は「社会教育の施設と方法」(『社会と教化』第一巻第四号)で、「音楽といふ様なものを利用して国民の美風を助長するといふ様な事も出来るのである」(p. 6)と述べている。

音楽と各種修養団体、学校教育との関係について論じた記事は、これらの娯楽問題から派生したものとして考えられる。たとえば、「社会中心としての学校(エー・リー・マツジュ著、文学士後藤弘毅訳)」(『社会と教化』第一巻第四号)においては、「社会の公衆が区の学校校舎に集つてお互いに胸襟を開放し皆の知つてゐる愛国的唱歌又は国民唱歌を思ひきり十分に歌ふことはいい効果を収むるものである」(p. 37)とし、学校の活用という文脈において、思想の問題と結びつけて音楽について論じている。また、学校以外の場については、衆議院議員の鵜澤聡明が「趣味と娯楽の向上を図るべき音楽会、演劇、活動写真等の洗練

したる設備をなすを最も急務と存じ候」(「社会教育上最も急務とすべき施設如何(二)」『社会と教化』第一卷第三号 p.52)と述べている。総じて、当時の音楽の娯楽としての側面が強調され、風紀粛清の問題と関連して扱われていたことがわかる。

しかし、『社会と教化』第三卷第六号の時点で、乗杉はややその論調を転換させている。曰く、「凡そ人生は只よく働き、よく儲けて人間を機械化すると云ふことが我々の理想ではないのであつて、業務そのものに趣味を感じずる以外に、我々の深き欲求としては、趣味を解し娯楽を味はつて、その生活内容を豊富にする所に真の人生の意義がある」(「趣味の教育と娯楽の教養」 p.2)という。上述のような風紀粛清の問題をこえ、日々の生活や人生の充足が強調されていることが見て取れる。いわば、かつての風紀粛清のための手段としての音楽は、人間形成のための娯楽としてその位置づけを変化させたのである。前項で検討したように、『社会と教化』の第三卷以降、童謡・俗謡・民謡が、国家主義的思想を歌ったものから情景を歌ったものへと移り変わっていたのは、乗杉のこのような音楽に対する感覚の変化を反映させているのではないだろうか。

なお、このような人間形成のための娯楽としての音楽という乗杉の主張は、乗杉が文部省を去った後の『社会教育』第二卷第九号に至り、藝術としての音楽という主張へと展開してゆく。田邊尚雄は、「音楽の社会教育と学校教育との相違」(『社会教育』第二卷第九号)において、「どうも今日の世の中は単に歌を歌ひ、音楽を奏することを以て音楽であるといふやうに考へて居る。巧妙に唱つたり弾ひたりすれば、それはよい音楽であるやうに考へて居る者が多い。音楽家は唯上手に唱ひ弾くことばかり苦心をし、又た聴く方でも上手であれば敬服して居るといふやうな様子が見える」(p. 10)と、大衆に流布する音楽の現状を憂い、藝術としての音楽へ向上させる必要性を説く。同様に、仲木貞一は「娯楽より藝術へ」(『社会教育』第二卷第九号)において、「今日迄の学校教育も又社会的の教育も、皆この物質文明に適応するやうに人間を作り上げる事に努力したので、頗る利巧的な如才なき、調子のよき機械のやうに、こまめに働く人間がどしどし殖えて来たが、この人達は機械化されて人類一般に都合よく働く者のやうで、その実彼等の裏面は、驚く可き不道德と反社会的の、全く利己一点張りの人間なのである」(p. 14)とこれまでの教育を批判したうえで、「殆ど凡ての藝術は、娯楽となり得ると同時に、それを享受する人に取つて精神的に偉大な効果のある」もの(p. 16)とし、藝術の重要性を強調している。このように藝術としての音楽が強調されるようになったのは、1920年代後半以降、商業資本による娯楽文化として、レコード流行歌が売り出されるようになったことも関わっていると思われる。

4. 乗杉校長時代の東京音楽学校

4-1. 娯楽としての音楽と藝術としての音楽

前節で検討したように、乗杉の考える社会教育における音楽は、風紀粛清のための手段から、それを越えて人間形成のための娯楽へと移行していった。しかし、乗杉の赴任先である東京音楽学校は、当時、藝術としての音楽を象徴する場所として考えられていた。これは、第一次世界大戦後に設立され、文部省に「美育」(≡「藝術教育」)の重要性を訴え続けていた日本教育音楽協会が、東京音楽学校出身者によって構成されていたためである(上田 2010:70)。なお、日本教育音楽協会がこのような働きかけを文部省に行った背景には、

当時の文部省が実科教育を重視するために唱歌科・音楽科の教授時数を削減する方向で動いており、東京音楽学校の卒業生の主要な就職先であった唱歌や音楽科の教師の重要性を低下させようとしていたためであったとされる。

では、乗杉は、東京音楽学校時代に、いかなる働きかけを行ったのだろうか。『東京音楽学校一覧』の「沿革」および、同窓会回報である『同声会年報』から大きく見て取れることとして、①年譜に記される行事、出来事の増加、②学校と同窓会の連携強化が挙げられる。例えば、1929年7月には、従来校内でのみ開催していた演奏会を初めて日本青年館において行ない、以後は、毎年、定期演奏会を日比谷公会堂で行うようになった。これについては、「音楽学校が日本青年館に出たことは頑迷にして官僚的な音楽学校長の大きな手柄であつた」（『音楽世界』第1巻第8号、1929年8月 p.73）という評価が寄せられた。さらに、翌1930年には、「現代青年男女の実生活の向上醇化の為の歌詞歌曲」、「街頭に於ても学校に於ても同時に歓迎されるべき歌曲」、「日本民族性を多分に内容とする学校音楽と、街頭音楽の創生」を目指し、唱歌編纂事業に乗り出したという（『同声会年報』1930年2月 p.9）。

これらはいずれも、社会全体で教育を行なう体制を整えようとした、文部省時代の乗杉の思想を引き継いでいるとともに、単なる風紀粛清のための音楽でもなく、純然たる芸術としての音楽でもなく、という乗杉の音楽観を示しているようにも思われる。このような乗杉の音楽に対する意識は、昭和6（1931）年の卒業生に対する祝辞にも端的に現れている。乗杉は、「前途有為ナ青年子女ヲ国家社会ニ送り出ス」と題した式辞の中で、「音楽ハ社会性ヲ有スルモノ」であるという自覚をもって社会に出、閑暇人や遊び人の仕事という世間の謬見を強制し、国家に貢献することをよびかけたという。

また、本稿では十分に触れられなかったが、乗杉が中心となって編纂した『新歌曲』（1931年）が、社会教育と学校教育に同時に適用できるものとして、一般の人々が愛唱でき、かつ文学的鑑賞に耐える歌詞をもつものをめざしていた（三枝 2010）ということも見逃せない。というのも、前項で検討した、芸術としての音楽を主張した田邊や仲木といった論者は、あくまで学校における音楽教育の拡張に焦点を当てており、乗杉の「街頭に於ても学校に於ても」とは異なる立場をとっていたためである。

4-2. 乗杉の音楽観と当時の社会状況

このように、乗杉の音楽観は、芸術としての音楽を強調する傾向にあった従来の東京音楽学校とは異なり、社会としての調和を念頭においた教育意識に裏打ちされたものであった。しかしながら、彼の精力的な活動をもってしても、結果的に当時の社会において非教育的なものとみなされていた流行歌の勢いは止まらず、社会教育の現場で「亡国的、生欲的、俗悪音楽が流行して青年は知らず知らずそれらを愛唱し知らず知らず柔弱淫乱に流れて停止することを知らないのである」（小出 1933:629）と評された。

こうした流行歌＝俗悪音楽とみなす認識に対して、上田（2010）は、これらは一義的な見方であり、これらの流行歌にも教育的意図が含まれていたという。なぜなら、これらの流行歌の作者たちは、過酷な労働や生活に追われる大衆が歌を口ずさむことを通し、自然に明日への活力を得るという陶冶性（＝教育の可能性）を積極的に模索していたからである。この大衆のための歌という精神は、むしろ乗杉の音楽観に近い方向性を持っており、それ

ゆえ、このことを踏まえると、乗杉の音楽学校時代の政策は、単に流行歌による社会の退廃を回避しようとしたものではなく、教育的な音楽が広がる素地を作ろうとしたものとして評価できるのではないだろうか。

こうした乗杉の音楽観は、以下のようなエピソードにも現れている。乗杉は、流行歌撲滅を説く音楽教師に対し、「音楽は普及性を持たせなければならぬ、高い所に留まつて威張つて居てはいかんと云ふ事。なる程歌謡なり民謡なり俗謡なりつまらないものはあるけれども、ああいふものが何うして普及性を持つかといふと、それは悪い点もあるだらうが、民衆にピタツと来るといふ長所もある。さういふ長所が何処にあるか。それは君達に研究して貰はなければならぬ」(「教育音楽研究大会概況」『教育音楽』1940年1月 p. 50) と述べたという。

5. むすびにかえて

本稿は、社会教育としての音楽に、様々な意味がこめられ、それが推移していった過程について辿っていった。それは同時に、娯楽としての音楽と藝術としての音楽が交じり合つて展開してゆく過程であったともいえるだろう。本稿では、大衆がこれらの音楽をどのように受容していったのかという点は検討できなかったものの、少なくとも当時の行政官たちの教育意図の一端を明らかにすることはできたのではないだろうか。

『社会と教化』時代の初期に見られた、ある意味では「実用的」といえるような音楽は、現代においてはあまり見られなくなっている。しかしながら、その根本にある教育的な音楽という視点は、形を変えて脈々と受け継がれていたと考えられる。このことを踏まえると、やはり現代においても、社会教育における音楽活動は、単なる教育活動への導入ではなく、活動そのものに教育的意図が含まれうるもの、として見ることもできるのではないだろうか。

なお、本稿の課題としては、①大衆の音楽受容についての検討が不十分であったこと、②資料の制約から、東京音楽学校時代の乗杉について十分に検討しきれなかったこと、③当時の学校教育における音楽活動との対比が十分にできなかったこと、がある。これらについては、今後の課題としたい。

【引用・参考文献】

1. 岡田忠男(1983)「乗杉嘉壽」『社会教育論者の群像』全日本社会教育連合会, pp. 105-116.
2. 上田誠二(2010)『音楽はいかに現代社会をデザインしたか』新曜社.
3. 小出浩平(1933)「青年訓練所の音楽教育」田村虎蔵先生記念刊行会編『音楽教育の思潮と研究』目黒書店, pp. 628-639.
4. 三枝まり(2010)「東京音楽学校における『新歌曲』(1931)編纂」『東京藝術大学音楽学部紀要』36, pp. 103-120.
5. 関屋隆吉(1975)『社会教育事始め』顕彰会出版局.
6. 高萩保治(2000)「生涯学習の一環としての音楽教育」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究3』音楽の友社, pp. 160-171.

7. 高橋範行(2014)「生涯音楽学習としてのポピュラー音楽活動と音楽科教育」『生涯発達研究 6』 pp. 7-16.
8. 乗杉恂編(1995)『乗杉嘉寿遺文集』私家版.
9. 乗杉嘉寿(1923)『社会教育の研究』同文館.
10. 兵藤裕己(2000)『〈声〉の国民国家・日本』日本放送出版協会.
11. 丸林実千代(1999)『生涯音楽学習入門』音楽之友社.
12. 山住正己(1967)『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会.